

## 『スペイン語記述文法』における動詞単純時制の取り扱いについて

山村, ひろみ  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5443>

---

出版情報：言語文化論究. 15, pp.155-172, 2002-02-15. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 『スペイン語記述文法』における動詞単純時制の 取り扱いについて

山 村 ひろみ

### 0. はじめに

本稿は関西スペイン語学研究会のプロジェクト「『スペイン語記述文法』の和文ガイドブック作成(仮称)」の一部をなすものである。

『スペイン語記述文法』(*Gramática descriptiva de la lengua española*, Ignacio Bosque, Violeta Demonte 編, Real Academia Española, Colección Nebrija y Bello, 全3巻, Espasa Calpe, Madrid)は1999年、現代スペイン語学界の重鎮である Ignacio Bosque, Violeta Demonte 両博士を中心に気鋭のスペイン語学研究者73名によって執筆された本格的な現代スペイン語記述文法書で、現段階で望まれる最高の質と量を誇るスペイン語統語論・形態論となっている。全体は78章からなり、それぞれ第1巻「品詞の基礎的統語論(Sintaxis básica de las clases de palabras)」, 第2巻「基本的統語構造/時制, アスペクトおよび法関係(Las construcciones sintácticas fundamentales/Relaciones temporales, aspectuales y modales)」, 第3巻「文と談話の間/形態論(Entre la oración y el discurso/La morfología)」の3巻に分かれて掲載されている。本稿が紹介するのは、そのうち第2巻第44章に収められた Guillermo Rojo と Alexandre Veiga (以下, R & V と略記)の執筆になる「動詞時制・単純時制(El tiempo verbal. Los tiempos simples.)」(pp. 2867-2934)である。

執筆者である R & V はともにスペインの Universidade de Santiago de Compostela に所属する研究者であり、特に Rojo は、Rojo(1974)において、現代スペイン語の時制体系に関し、従来の諸説の問題点を指摘しつつまったく新たな観点からの分析を試みたことで有名である。また、Veiga も Rojo(1974)で提起された時制論に依拠しつつ、Veiga(1987)ではいわゆる「歴史的現在(presente histórico)」に関する詳細な分析を、また、Veiga(1990)では、これまでその法的位置付けをめぐる議論の絶えなかった futuro, condicional の分析方法について明確な判断規準を提示する等、とりわけ時制や法の分野で活発な活動を続けている。今回、現代スペイン語の時制体系の執筆にあたり、この Rojo と Veiga がその担当をまかされたという事実は、彼らの分析・解釈が当該分野において一定の評価を得ていることを示したものと見てよからう。

以下では、まず、第1節でこの章全体の構成を概説し、第2節では本章を執筆した R & V のスペイン語動詞時制の分析方法とその解釈、さらに、彼らの見解をとりわけ独創的なものにしていくそのアスペクトの扱い方をやや詳しく見てみたい。そして、第3節では、上で紹介された R & V の現代スペイン語動詞単純時制の分析・解釈におけるいくつかの問題点を指摘する。

## 1. 構成の概略

本節では、R & V の現代スペイン語時制体系に対する見解の概略をつかむために、彼らが執筆した第44章全体の構成を簡単にまとめてみる。

### 1.1. 第44章第1節 序<sup>1)</sup>

第44章の最初の節では、現代スペイン語の動詞単純形と複合形の扱いについての R & V の見解が述べられている。彼らは、現代スペイン語動詞の単純形と複合形は同一の体系内で処理されるべきとし、その理由として、例えば、canté と había cantado の間に見られる時間関係における機能的平行性、また、canté/habría cantado の間に見られる叙法関係における機能的類似性をあげている。

### 1.2. 第44章第2節 動詞時制<sup>2)</sup>

本節で R & V は、まず、言語的時間(tiempo lingüístico)の考察が難しいのはそれが物理的時間(tiempo físico)や歴史的時間(tiempo cronológico)と混同される傾向があるからだとして指摘し、そのような混同を避けるためには物理的時間、歴史的時間、言語的時間の違いを明らかにしなければならないと述べている。以下、彼らの考える物理的時間、歴史的時間そして言語的時間の説明が続くが、それは次のようにまとめられる。

R & V によれば、上記3つの時間のうち、物理的時間とそれ以外、つまり、歴史的時間・言語的時間の間には明確な違いがあり、物理的時間は人間の外にある(exterior al hombre)、無限(infinito)で線状的(lineal)かつ不可逆的(irreversible)なものであるが、歴史的時間は人間の経験する出来事間の前後関係を示すもので、Benveniste によれば、その実現には常に基準となる時点<sup>3)</sup>、それに対する方向(前時・同時・後時という意味での方向性)、さらに出来事の時間的距離を示すものが必要だという。そして、本章が問題とする言語的時間については、その実現に際し基準となる時点およびそれに対する方向が不可欠となる点において歴史的時間と共通する部分はあるものの、その基準時が通常発話時になること<sup>4)</sup>、また、歴史的時間の最終目標が出来事の年月日を特定することにあるのに対し、言語的時間のそれは単に当該事態を発話時との方向関係において時間軸に定位することだけにあること、という二点において両者は異なっていると主張している。この言語的時間の具体的な分析方法ならびにその現代スペイン語動詞単純時制への実際的応用については本稿第2節で詳述する。

### 1.3. 第44章第3節 現代スペイン語動詞の単純形とその基本的時制の実現<sup>5)</sup>

本節は、現代スペイン語動詞単純形の時制機能を、先に述べた言語的時間という枠組みで具体的に考察したものである。まず、各形式の本来的用法(usos rectos)の分析が行わ

1) Cf. pp. 2869-2871.

2) Cf. pp. 2871-2889.

3) 例えば、キリストの誕生やマホメットの聖遷、さらには、元号の制定などがこれに相当する。

4) R & V は言語的時間の基準時は常に発話時にあるわけではなく移動可能だと主張している。cf. p. 2873.

5) Cf. pp. 2900-2919.

れ、その後、それらの転位用法(usos dislocados)が扱われている。この転位用法というのは、例えば、futuro の発話時における推量表現、pretérito imperfecto の発話時の婉曲表現といったこれまで当該形式のモーダル用法と呼ばれてきたもののことをいう。従来これらの用法はもっぱら当該時制形式の本質的機能とは無関係な特殊なものと思なされることが多かったが、R & V はそれらを当該時制形式の本質的機能と関連づけながらあくまで現代スペイン語時制体系の枠組みの中で統一的に説明しようとした点で異彩を放っている。

#### 1.4. 第44章第4節 スペイン語動詞体系の中核における時制とアスペクト<sup>6)</sup>

本節では、特に pretérito perfecto simple と pretérito imperfecto の機能的差異を問題にしながら、スペイン語動詞体系内にアスペクトという範疇を導入することの是非が論じられている。結果的に、R & V は上記二形式の機能的差異を説明するためにアスペクトは必要ないと結論づけているが、その理由は、それらの実態がアスペクトという範疇を導入するのに必要な条件を満たしていないからだという。つまり、pretérito perfecto simple と pretérito imperfecto はアスペクトを導入しなければ説明のつかないような同一の時制的内容(contenido temporal)を共有しているわけではなく、また、それらの間にはアスペクトによってしか説明のつかない直接対立も存在しないというのである。このような見解は、これまでアスペクトの存在を自明としてきた学界にとっては大きな衝撃であるが、その是非はいまだ決着を見ていないように思われる<sup>7)</sup>。この節については、本稿第3節でさらに詳しく見ていく。

#### 1.5. 第44章第5節 動詞単純形のいくつかの周辺の用法<sup>8)</sup>

本節では、現代スペイン語ではほとんど使われることなくなった接続法未来形、また、スペイン北部、特にガリシア地方に見られる pretérito perfecto simple による pretérito perfecto compuesto の代用、また、接続法過去 -ra 形による pluscuamperfecto の代用、さらに、特に中南米地域で見られる接続法現在形による接続法過去の代用の実態が詳述されている。

以上、R & V が執筆した章の概略を見た。第2節では、このうち R & V の見解がもっとも明確に出ている彼らの言語的時間の分析方法ならびに現代スペイン語動詞へのその応用を詳しく見てみる。

6) Cf. pp. 2919-2922.

7) pretérito perfecto simple と pretérito imperfecto の機能的差異をアスペクトによって説明すべきか否かについてはいまだに結論が出ていない。その証拠に、例えば、同じ『スペイン語記述文法』の第48章では、García Fernández が R & V の立場とは全く逆の立場、すなわち、これら二形式の機能的差異はアスペクト範疇における対立に他ならないという立場から、時間副詞句と各時制形式の共起関係を論じている。cf. pp. 3129-3208.

8) Cf. pp. 2922-2928.

## 2. 言語的時間の分析の方法と現代スペイン語動詞単純形へのその応用<sup>9)</sup>

### 2.1. 時間関係 (relaciones temporales)

1.2. で見たように、R & V は、言語的時間とは歴史的時間と同じくある基準時とそれに対する前時・同時・後時という時間関係 (relaciones temporales) から成り立つものと考えているが<sup>10)</sup>、それらの時間関係は次のようなベクトル記号によって明示されるとしている<sup>11)</sup>。

O=origen      -V=anterioridad      oV=simultaneidad      +V=posterioridad

O はすべての時間関係の基準時 (punto cero) を示し、一般的には発話時がそれを担う。事態のもっとも基本的な時間関係はまずこの O に対して設定され、それらは各自次のような公式によって示される。なお、公式の右は R & V があげた各時間関係の例文である。

- (1) a. O-V: Salieron ayer de París.  
 b. OoV: Están hoy en Madrid.  
 c. O+V: Llegarán a Sevilla mañana. (p. 2877)<sup>12)</sup>

上記に従うならば、O-V は発話時に対して前時的時間関係を示し、それは pretérito perfecto simple (以後、p. s. と略記) によって表出されることになる。同様に、OoV は発話時に対して同時的時間関係を示し、presente によって、また、O+V は発話時に対して後時的時間関係を示し、futuro によって表出されるということになる。しかし、周知のようにスペイン語の時制形式は上にあげた 3 形式だけではない。この 3 形式以外のもっと複雑な時間関係を示す諸時制形式はどのように記述されることになるのだろうか。この点について、R & V は次のように記している。

“La evidente existencia de relaciones temporales más complejas no procede del aumento de esas posibilidades iniciales, sino de su encadenamiento en una serie teóricamente ilimitada de escalones.” (Ibid.)

すなわち、より複雑な時間関係は以下に示すように、前述の 3 つの基本的時間関係が連鎖されたものとして記述されるのである。

9) 以下では紙幅の都合上、直説法単純形しか扱わない。

10) ここで用いられている「時間関係」(relaciones temporales) という用語と 1.2. で用いられた「方向性」(orientación) は、ともに当該事態の基準時に対する前時・同時・後時関係を示していることから同じものと考えられる。

11) R & V も述べているように、これらの記号は彼ら独自のものではなくすでに Bull (1960), Klum (1961) が用いていたものである。cf. p. 2876.

12) 例文につけられたページ数は出典が明記されていない限りすべて R & V の論文中のページを示す。

- (2) a. Me comunicaron que habían salido de París el día anterior.  
           (O-V)                          (O-V)-V
- b. Nos aseguraron que estaban en Madrid ese mismo día.  
           (O-V)                          (O-V)oV
- c. Me prometieron que llegarían a Sevilla al día siguiente. (Ibid.)  
           (O-V)                          (O-V)+V

(2a)の従属動詞 *habían salido* は(O-V)-V という公式によって示されているが、これは当該時制形式、すなわち、*pluscuamperfecto* (以下、*plusc.* と略記) が(O-V)の示す *referencia* に対して前時的関係にある事態を表出することを表わしている<sup>13)</sup>。しかし、ここで注目すべきは、この *plusc.* の *referencia* 自体が基準時 O に対して前時的関係にあることを示す(O-V)という公式によって表わされている点で、このことから *plusc.* の示す前時的関係はあくまで O の示す基準時(発話時)より前に置かれた、O とは別の時点に対するものであることが分かる。換言すれば、*plusc.* は先に見た(1a)の p. s. のように、基準時 O と直接的な時間関係を持っていないのである。同様のことは(2b)、(2c)についてもいえる。(2b)の従属動詞 *estaban* は *pretérito imperfecto* (以下、*imp.* と略記) であるが、その公式(O-V)oV は、*imp.* の時間関係が *plusc.* と同じく、基準時 O より前に置かれた(O-V)に対して同時的關係にあることを、また、(2c)の従属動詞 *llegarían* の公式(O-V)+V は、*condicional* の時間関係が基準時 O より前にある(O-V)に対して後時関係にあることを示しているからである。

以上のことから、R & V の主張するスペイン語の時制形式には、通常発話時と見なされる基準時 O に対して直接的な時間関係を示すものと、O とは異なる基準時に対して時間関係を示すものがあることになるが、これは伝統文法のいう絶対時制(*tiempos absolutos*)と相対時制(*tiempos relativos*)に対応するものである<sup>14)</sup>。しかしながら、R & V は“*el tiempo verbal es una categoría deíctica y, por tanto, todas las localizaciones son relativas.*”<sup>15)</sup> と述べ、自分たちの分析が伝統的なそれとは一線を画していることを強調している。

## 2.2. R & Vによるスペイン語直説法時制形式の分析

上で見た R & V の言語的時間の分析方法によると、スペイン語の直説法時制形式はそれぞれ以下のように公式化されることになる。

(3) <i>canté</i>	O-V	<i>pretérito</i>
<i>canto</i>	OoV	<i>presente</i>
<i>cantaré</i>	O+V	<i>futuro</i>
<i>había cantado</i>	(O-V)-V	<i>ante-pretérito</i>

13) R & V の公式は右から左へと読まれる。従って、*pluscuamperfecto* の(O-V)-V は「(O-V)に対する前時的関係を示す」ということになる。

14) Cf. p. 2880.

15) Cf. p. 2881.

cantaba	(O-V)oV	co-pretérito	
cantaría	(O-V)+V	pos-pretérito	
he cantado	(OoV)-V	ante-presente	
habré cantado	(O+V)-V	ante-futuro	
habría cantado	((O-V)+V)-V	ante-pos-pretérito	(pp. 2281-2282)

R & V はこの公式の中でもっとも右に置かれたベクトル記号を第一次ベクトル(vector primario)と呼び、当該形式の第一次時間関係(relación temporal primaria)を示すものとしている。また、その第一次時間関係が設定される時間軸上の時点のことを参照時(punto de referencia)と呼び、それは O で示される基準時のこともあれば、それ以外のこともある。さらに、この参照時のうち O のすぐ右に置かれたものは特に基準ベクトル(vector originario)と呼ばれる。これらのことを imp. の公式(O-V)oV に則して説明すると、その第一次ベクトルは同時性を示す oV であり、参照時は基準時より前に置かれた(O-V)、さらにその基準ベクトルは -V ということになる。そして、これらすべてをまとめたもの、すなわち「基準時 O より前にある参照時に対して同時的關係にある事態を示す」というのが imp. の基本的時間的意味と解釈されるのである。

R & V によれば、従来のスペイン語の時制の体系化はもっぱら単純形対複合形といった形式の違いに依存したり、R & V のいう基準ベクトルの意味するところに依存していたため、例えば、presente と imp., あるいは、futuro と condicional の間にある類似性が説明されずにきたという。しかし、このような不都合も R & V の分析ではその第一次ベクトル、つまり第一次時間関係の類似性によって簡単に説明されることになる。

ところで、以上の R & V の分析は、スペイン語の時制形式をただ法的価値と時間的価値のみによって解釈しようとする点で「時間的」(temporalista)と言われるが、このような観点は R & V が初めて提起したものではない。彼ら自身も指摘しているように、その創始者は19世紀の偉大なスペイン語学者 Bello であり、それは彼が各時制形式に与えた名称に明らかだという。確かに、(3)の右欄にあげた Bello のつけた各時制形式の名称の中にある ante-, co-, pos- はそれぞれ R & V の -V, oV, +V が示す第一次時間関係に対応しており、Bello の解釈が R & V のそれと同様に「時間的」であることを明示している。

### 2.3. origen の可動性と歴史的現在(presente histórico)

先にも見たように、R & V の主張する言語的時間は、ある基準時とそれに対する時間関係によって規定されるものであり、その基準時には一般に発話時と同一視される origen と呼ばれるものと、この origen に対して前時・同時・後時的関係にある参照時(punto de referencia)と呼ばれる2種類があるということだった。しかし、このことから R & V が origen と発話時を完全に同一視していると理解すべきではない。なぜなら、彼らは、確かに origen は発話時であることが多いが、だからといってそれは origen が発話時にあることを意味しているわけではなく、origin は発話時以外に設定することも可能であると述べているからである<sup>16)</sup>。このような発話時と基準時を必ずしも対にしない見方は、R & V

16) Cf. p. 2889.

も指摘しているように、時制研究の中では異色である<sup>17)</sup>。しかしながら、R & V は、*origen* が発話時以外にもなりうることは、例えば、手紙の受信時を基準としてその時制形式が決定されるラテン語の書簡文の存在を見ても明らかだとしている。とはいえ、彼らにとって、この *origen* の可動性、つまり、*origen* の発話時以外への移動が何よりも如実に観察されるのは日常会話で頻繁に起こる歴史的現在 (*presente histórico*) の用法においてだという。

(4) Te cuento: ayer *iba* yo tan tranquilo por la calle cuando *apareció* un chiflado en una moto que casi me *atropelló*. (p. 2891)

(5) Te cuento: ayer *voy* yo tan tranquilo por la calle cuando *aparece* un chiflado en una moto que casi me *atropella*. (Ibid.)

(4)は昨日起こった出来事を述べた文であり、その基準時 0 は発話時にある。一方、(5)は(4)と同じ出来事が *presente* で表出されたいわゆる歴史的現在の用法である。R & Vによれば、(5)で *presente* が使用されているのは、その基準時が発話時から当該事態の生起した *ayer* に移動したからであり、その結果、基準時と当該事態との時間的距離がなくなり、歴史的現在に特有の生彩さや劇的効果が生まれているのだという。R & V の主張する *origen* の可動性は、以下に見る歴史的現在以外の時制形式の変更も簡単に説明できる。

(6) El poeta X. X. *nació* en 1523, cuando su país *había logrado* la independencia y se *respiraba* un clima de exaltación patriótica; *moriría* en 1597 y a lo largo de su vida *habría compuesto* más de dos mil poemas. (p. 2892)

(7) El poeta X. X. *nace* en 1523, cuando su país *ha logrado* la independencia y se *respira* un clima de exaltación patriótica; *morirá* en 1597 y a lo largo de su vida *habrá compuesto* más de dos mil poemas. (Ibid.)

(6)は発話時を基準時とした文であるが、(7)は(6)で記述された事態 *nació* の生起した時点 *en 1523* を基準時とした文である。つまり、(6)と(7)では基準時が発話時から1523年へと移動しているのである。このことから(6)で用いられた時制形式の時間関係はすべて1523年を基準時として再解釈されることになり、結果的に、(6)で *plusc.* だったものは(7)では *p. c.* に、また、*condicional* だったものは *futuro* にというように変更されるのである。R & V は、自分たちの主張する *origen* の可動性は、このように歴史的現在以外の時制形式も説明可能な点からも妥当なものであるとしている。

#### 2.4. 転位用法について

R & V の考える言語的時間の分析方法に従ったスペイン語の直説法時制形式の記述は

17) R & V によれば、代表的時制研究である Bello(1847), Reichenbach(1947), Bull(1960), Benveniste(1965)のどれもが言語的時間関係の基準時は発話時と規定しているという。cf. p. 2889.



すでに2.2. で見たが、これらの時制形式の中にはその記述では説明できない特殊な用法を持つものがある。例えば、以下に見られるような *futuro*, *condicional*, *imp.* の用法がそれにあたる。

- (8) En estos momentos serán las cuatro. (p. 2913)  
 (9) Moriría el año pasado. (Ibid.)  
 (10) De buena gana vivía en el campo, pero no me lo puedo permitir. (p. 2895)

(8)は発話時と同時的時間関係にある事態に言及しているにも拘わらず発話時以後の事態を示す *futuro* を使用し、当該事態が不確実(*incertidumbre*)であることを表出している。同様に、(9)も過去の事態に言及しているのに、ある過去の参照時以後の事態を示す *condicional* を使用し当該事態の不確実性を表出している。さらに、(10)では、条件句の帰結節にあたる部分で過去の参照時と同時的時間関係にある事態を示す *imp.* が用いられ、当該事態が発話時において非現実(*irreal*)であることが示されている。これらの例に出現した時制形式に共通しているのは、どれもが先に規定されたその時間関係とは異なる時間関係を「不確実」「非現実」といったモーダルな意味合いと共に表出しているという点である。R & V はこのような時制形式の特殊用法のことを当該形式の転位用法 (*uso dislocado*) と呼び、2.2. で記述したその本来用法 (*uso recto*) とは区別した。

時制形式のモーダルな用法の扱いをめぐるのはこれまでも様々な議論が行われてきた。なかでも論争的となったのは *condicional* で、この形式は現在のように直説法と分類されるまで接続法や可能法 (*modo potencial*) といった異なる法に帰属させられてきた<sup>18)</sup>。また、非現実の *imp.* についても、同用法と *imp.* の本来用法との関係を整合性のある形で説明することはきわめて困難だったため、研究者の多くはその存在を指摘するに留めるのが常だった。このような状況の下、R & V は、これら特殊用法を単に転位用法と名付けるだけでなく、そのような用法が生じるメカニズムをその本来用法との関係から統一的に説明しようとした点で特筆に値する。以下、その概略を見る。

まず、(8)(9)に見られる当該事態の「不確実性」を含意する転位用法については、以下の矢印が示すように、当該時制形式の公式中の後時ベクトル +V が同時ベクトル oV に取って代わられた、あるいは、完全に削除されたと解釈することによって説明されることになる。この解釈に従うならば、これまで別箇に扱われてきた「不確実」というモーダルの意味合いを付加しつつ本来とは異なる時間関係を表出する転位用法はすべて、各時制形式が持つ後時ベクトルの同時ベクトルへの転換あるいは削除の結果という形で統一的に理解されることになる。

O+V	→	OoV	futuro	→	presente+不確実
(O-V)+V	→	O-V	pos-pretérito	→	pretérito+不確実
(O-V)+V	→	(O-V)oV	pos-pretérito	→	co-pretérito+不確実

18) Cf. p. 2893.

同様に、(10)のように「非現実」を含意することになる転位用法も、当該時制形式のベクトルが別のベクトルに転換されたと解釈することによって説明されることになる。つまり、そこでは以下の矢印が示すように、当該時制形式の公式中にある前時ベクトルが削除されたと解釈されるのである<sup>19)</sup>。

(O-V)oV → OoV imperfecto → presente+非現実

以上のような R & V の解釈に従うならば、とりわけ *condicional* の持つモーダルの特殊性が明らかになってくるだろう。*condicional* の公式中には、「不現実」の転位用法を説明する際に用いられた後時ベクトルと「非現実」の転位用法を説明する際に用いられた前時ベクトルの両方が含まれていることから、同形式は(8)(9)で見た当該事態の「不現実性」のみならず、次例のような当該事態の「非現実性」をも表出可能ということになるからである。

(11) En estos momentos estaría encantado en la playa. (p. 2914)

## 2.5. 時制形式とアスペクトの扱い

R & V のスペイン語時制形式の解釈の中でもっとも特徴的なのは、従来、自明とされてきたアスペクト範疇に疑義を呈し、その存在を否定した点である。そこで、本節では、彼らがスペイン語動詞体系の中からアスペクトを排除するに至った経緯をやや詳しく追ってみてみたい。

まず、R & V は、動詞体系へのアスペクト範疇の導入はスラブ諸語や古典ギリシア語においては妥当だがラテン語やロマンス諸語においては議論の余地があると述べる。このことから、彼らのアスペクト範疇無用論が、単にスペイン語という個別言語において観察される諸現象に基づいたものではなく、広く一般言語的な枠組みを背景としたものであることが分かるが、彼らの依拠するその枠組みによれば、スペイン語の動詞体系にアスペクト範疇を導入することを是とする人々は以下のことを認識していなければならないという。

第一に、ある形式がアスペクト的意味合いを持っているからといって、それがそのままアスペクトという範疇の導入に繋がるわけではないこと。つまり、Coseriu(1980)もいうように、文法内容(*contenido gramatical*)の普遍的クラスである文法範疇は確かに様々な言語において表出されるが、だからといって当該範疇がすべての言語において機能的に存在していなければならないということにはならないということである。

第二に、動詞体系においてアスペクトを独立した範疇として設定するためには、機能的に、時制的価値と法的価値の両方においてまったく等しい項(*unidades*)の間に少なくともひとつの対立関係が特定(*identificar*)されていなければならないということ。換言すれば、もし問題とするアスペクト的な相違が常に時制的価値も異なる項の間において認められるものならば、その体系内にわざわざアスペクトという新しい範疇を導入する理由はないと

19) Cf. p. 2895.

いうことである。

さて、このような理論的枠組みに従った R & V にとって、スペイン語におけるアスペクト範疇導入の議論の中心となってきた p. s. と imp. の対立の問題は、次のように解釈されることになる。

先述したように、動詞体系内に新たにアスペクト範疇を導入するには、当該項の時制的価値と法的価値が完全に等価であることが保証されていなければならない。しかしながら、R & V によれば、p. s. と imp. の間にそのような時制的価値の等価性を保証することはできない。p. s. の時制的価値は O-V, imp. のそれは (O-V) oV で、両形式の間には第一次ベクトル、参照時のどちらにおいても共通項が存在しないからである<sup>20)</sup>。従って、R & V は、p. s. と imp. の機能的差異を説明するためにアスペクト範疇を導入することには根拠がないというのである。

また、R & V によれば、本来最小対をなす項の間の対立は、定義上、同じ体系内の他の対立に影響することなく中和される(neutralizable)のだが<sup>21)</sup>、p. s. と imp. の間にそのような中和現象は認められない、従って、両形式の間には直接対立が存在しないと述べている<sup>22)</sup>。

以上のことから、R & V が p. s. と imp. の機能的相違を説明するのにアスペクト導入を認めないのは、それらの間に同じ時制的価値が存在しないこと、また、それらの間には直接的対立が認められないことの二点に拠るといえるだろう。そしてさらに、彼らは、アスペクト論者が主張する p. s. と imp. の間の意味的相違も結局はそれら二形式の間にある時制的価値の違いの二次的効果として説明可能であり、スペイン語の動詞体系内にアスペクトという範疇を新たに設ける十分な論拠にはならないと結論づけるのである。

### 3. 管見

ここまで R & V によるスペイン語の単純時制形式の分析を概観してきたが、本節ではそれに対して筆者が疑問に思う点をいくつか指摘していきたい。

#### 3.1. 事態の時間的的定位という見方について

R & V に従えば、言語的時間は基準時とそれに対する前時・同時・後時という時間関係から規定され、その具体的実現である時制形式の機能は、当該事態をその基準時と時間関係に従いながら時間軸上に定位する(localizar)ことにあるという<sup>23)</sup>。このような当該事

20) R & V は p. s. と imp. の時制的価値の違いを示すために、次のような、話法の転換時に見られる両形式の振る舞いの違いをあげている。Dijo: Lluvee. → Dijo que llovía. OoV → (O-V) oV Dijo: Llovió. → Dijo que había llovido. O-V → (O-V)-V R & V によれば、この違いから、imp. は presente と共通の同時性 oV の第一次ベクトルを有し、p. s. は plusc. と共通の前時性 -V の第一次ベクトルを有しているのが確認されるという。cf. p. 2921.

21) R & V は最小対の中和の例としてスペイン語の音韻体系における/p/と/b/のそれをあげている。cf. ibid.

22) R & V によれば、imp. と中和するのは p. s. ではなくむしろ condicional だという。なぜなら次のような条件節において、imp. と condicional は後時性について中和するからである。Si tu primo más tarde estaba (\*estaría) en casa... cf. ibid.

23) Cf. p. 2879.

態の時間軸上の定位化(localización)を時制形式の主たる機能とする見方は、時制研究ではごくオーソドックスなものであり R & V に固有のものではない。しかしながら、スペイン語時制形式の実際の振る舞いを観察してみると、この一般的見方をスペイン語にそのまま当てはめるのには問題のあることが分かる。なぜならばスペイン語の時制形式には次のような制約が存在するからである。

山村(1996, 1998)でも指摘されたように、スペイン語の命題(proposición)の中には p. s. による表出のきわめて困難な、あるいは、不可能なものがある。

- (12) \*Fueron las ocho. (山村 1996:53)  
 (12)' Dieron las ocho. (Ibid.)  
 (13) El vestido \*llevó perlas. (Doiz-Bienzobas 1995:132)  
 (14) ?María fue niña. (山村 1997:83)  
 (14)' María fue una niña mala. (Ibid.)

(12)は ser を用いた時間表現であるが、このタイプの時間表現が p. s. によって表出されないのはよく知られた事実である。なぜこのような制約が生じるかについての考察はきわめて少ないが<sup>24)</sup>、同様に時間を表わす dar を用いた命題が p. s. によって表出されることを考えるならば、その理由は[ser las ocho]という命題と p. s. の機能の間に合い入れない部分があるからだと推察される。また、(13)は el vestido という無生物を主語とした命題の p. s. による表出だがこれも非文となる。この例をあげた Doiz-Bienzobas (1995:132)によれば、(13)が非文なのは、当該命題の主語が p. s. による表出に必須の agentive role を欠いていることに因るといふ<sup>25)</sup>。さらに、(14)は、その命題内容からすれば、時間軸上の発話時より以前の時点ならどこでも定位可能と思われるのに、実際にはそれがきわめて難しい例である。この例については、(14)' のようにその一部分を少し変更するだけで、p. s. による表出が問題なく可能になる点から、(12)と同じく、[María ser niña]という命題自体に p. s. による表出を困難にさせている原因があると思われる。

さて、上記の例に共通するのは、その命題内容からすればどれも時間軸上の発話時より以前の時点に定位可能だと思われるのにも拘わらず、実際にはそれが不可能あるいは困難なため、結果的に、p. s. による表出が難しくなっているという点である。このことから、筆者は山村(1996)において、少なくとも R & V の規定した前時ベクトル-Vは単に時間軸上の前時性を示しているのではなく当該命題の不成立から成立への変化という認識上の問題と深く関わったものである、という前時ベクトルの再解釈を提案した<sup>26)</sup>。この再解釈を公式化すると、次のようになる。

$$O-V=O(\sim\text{Prop. \& Prop.})$$

24) 筆者の知る限り、この制約について何らかのコメントをしているのは Bull (1968:51) だけである。

25) しかし、山村(1998:196-197)でも指摘したように、p. s. によって表出された命題の中には agentive role を欠いた主語からなるものも存在する。

26) この考え方に従うならば、同時ベクトル、後時ベクトルについても前時ベクトル同様の認識的再解釈が行われるべきである。しかし、残念ながらそれは今後の課題に留まっている。

OはR & Vの解釈に従った基準時、~Prop & Prop.は当該命題の不成立から成立への変化を示す。従って、この公式によれば、O-V、すなわち、p. s.は、発話時から見た当該命題の不成立から成立への変化を示すということになる。p. s.の機能をこのように解釈し直すと、p. s.によって表出される命題は、その不成立から成立への変化が世間知として広く共有されたものであり、逆に、p. s.による表出の困難な命題は、その生起の過程が一般的に認知されにくいものと理解されることになる<sup>27), 28)</sup>。

### 3.2. 時間関係の連鎖について

次に、2.1.で見た時間関係の連鎖的解釈の問題点を指摘したい。R & Vによれば、実際のスペイン語において生じる複雑な時間関係は -V, oV, +Vの基本的時間関係の連鎖によって記述され、それは理論的には無限に続くということであった。このことはR & Vの記述の中に以下のような部分があることから確認される。

- (15) a. La radio anunció que *llovería*.  
 b. Me aseguraron que la radio había anunciado que *llovería*.  
 c. Me aseguraron que la radio anunciaba que *llovería*.  
 d. Me aseguraron que la radio anunciaría que *llovería*.

Como sea que *anunció*, *había anunciado*, *anunciaba* y *anunciaría* aparecen expresando respectivamente las relaciones de ‘pretérito’ (O-V), de ‘ante-pretérito’ ((O-V)-V), de ‘co-pretérito’ ((O-V)oV) y de ‘pos-pretérito’ ((O-V)+V) y que *cantaría* figura en cada uno de estos ejemplos representando una relación primaria de posterioridad medida desde una de estas relaciones temporales, se deduce que (15a-d)<sup>29)</sup> ilustran la posibilidad por parte de *cantaría*, en combinación con la significación modal propia de su uso recto (indicativo 0), de expresar las relaciones de ‘pos-pretérito’ ((O-V)+V), de ‘pos-ante-pretérito’ (((O-V)

27) 当該命題の生起が世間知的に認知されるには、その生起を引き起こす活動主体の存在を明示するものが必要である。この活動主体は必ずしも有生ではなく、無生のこともある。また、活動主体は主格のみならず、与格、対格、属格といった様々な格によって表出される。この点の詳細は山村(1998)を参照されたい。

28) ここで述べられた前時ベクトルの再解釈に従うならば、(12), (13), (14)の各命題が p. s. によって表出されないのは次の理由によると考えられる。まず、(12)の *ser* を用いた時間表現が p. s. によって表出されないのは、それが常にある時間を静的に指示するだけだからである。すなわち、*dar* を用いた時間表現が「時計が所定の時を打つ」という出来事としての解釈を提示するのに対し、*ser* の時間表現にはそのような出来事的解釈が一般に許されないのである。また、(13)が非文なのは、[*el vestido llevar perlas*]という命題が p. s. によって表出されると、まるで無生主語のドレスが自発的に真珠を身につけたような世間知的にはきわめて奇妙な意味合いになるからである。同様に、(14)の[*María ser niña*]が p. s. によって表出しにくいのも、その p. s. による表出は、子供でないマリアが子供になったというような(何か比喩的な文脈でもない限り)一般には理解し難い意味合いになるからと思われる。他方、(14)'の[*María ser una niña mala*]が問題なく p. s. によって表出されるのは、*mala* という形容詞の存在によって、当該命題の p. s. による表出が、*mala* でない(あるいは評価としては *neutral* な)マリアが *mala* な子供になった、あるいは、そのように評価されたという出来事的解釈を認めるからと考えられる。つまり、(14)'は評価の形容詞の存在により出来事的解釈が容易になっているのである。

29) R & Vの論文では(45)だが、本稿の例文の通し番号に合わせて(15)とした。

-V)+V), de ‘pos-co-pretérito’ (((O-V)oV)+V)<sup>30)</sup> y de ‘pos-pos-pretérito’ (((O-V)+V)+V), y es fácil adivinar que incluso podríamos obtener relaciones temporales más complejas encadenando sucesivas cláusulas subordinadas en correlación temporal. (p. 2899)

上の記述によれば、同じ *condicional* でも、それがどういう主動詞に従属しているかによって、((O-V)+V), (((O-V)-V)+V), (((O-V)oV)+V), (((O-V)+V)+V)という4つの異なる公式によって記述されることになる。しかし、このような解釈は、以下のような問題を起こすことになる。

(16) Dijeron que María trabajó en Correos. (Carrasco Gutiérrez 1998:385)

(16)' Dijeron que María había trabajado en Correos.

(17) Vimos que Juan la esperó sentado en la escalera. (Ibid.:326)

(17)' Vimos que Juan la esperaba sentado en la escalera. (Ibid.)

(16)の従属動詞を上での R & V に倣って記述すると (O-V)-V となる。trabajó は解釈上、主動詞 *dijeron* よりも前に生じた事態を示しているからである。しかし、そうなると、この p. s. は *plusc.* と同じものということになる。(16)' の従属動詞 *había trabajado* の時間関係も(16)のそれと同じく解釈上、(O-V)-V となるからである。同様に、(17)の従属動詞の p. s. は解釈上、(17)' の従属動詞 *imp.* と同じ (O-V)oV と公式化されることになる。よく知られているように、主動詞が過去の知覚動詞の時、その従属文に出現する p. s. は主動詞と同時的事態を示すからである<sup>31)</sup>。以上、要約すれば、R & V の主張する時間関係の連鎖的解釈をそのままスペイン語の実例に応用すると、彼らが提起したスペイン語の各時制形式の分析そのものが混乱しかねないということである。

また、時間関係の連鎖的解釈には、p. s. と *imp.* の間に見られるような時間関係の質的相違を無視してしまうという問題もある。R & V は、p. s. を(O-V)、*imp.* を(O-V)oV と公式化していたが、これによれば p. s. と *imp.* は -V という前時ベクトルを共有している。しかし、p. s. の公式に現れる前時ベクトルと *imp.* の公式に現れるそれとは質的にまったく異なるものなのである。なぜなら、p. s. の前時ベクトルは前節で見たように、当該事態の不成立から成立への変化といった話者の言語外現実の認知に直接関わるものなのに対し、*imp.* の前時ベクトルは単に *imp.* の基準時が発話時より前であることを示しているだけだからである<sup>32)</sup>。

30) R & V の記述ではこの部分は(((O-V)oV)-V)となっているが、明らかな間違いである。よって、(((O-V)oV)+V)と訂正した。

31) Cf. Carrasco Gutiérrez (1998), p.326

32) p. s. と *imp.* の前時ベクトルの質的違いは、以下のように確認される。

i) A las ocho, llovía mucho. ii) \*Fueron las ocho.

i)は *imp.* によって表出されていることから、その基準時は発話時より前の8時にあると解釈される。このことは「8時」自体が発話時以前の時間軸上に定位されることに何の問題もないことを示すものである。然るに、前節で見たように、同じ「8時」を示す命題[ser las ocho]をそのまま発話時より前の時間軸上に定位させること、つまり、それを p. s. によって表出することはできない。以上のことから、p. s. の前時ベクトルと *imp.* のそれは異なる性質のものであることが分かる。

このような時間関係の連鎖的解釈の弊害を避けるために、山村(1996)は基準時と時間関係を別箇に記述する次の公式を考案した。

(18) canté	O-V=O(～Prop. & Prop.)	pretérito
canto	OoV	presente
cantaré	O+V	futuro
cantaba	PoV	co-pretérito
cantaría	P+V	pos-pretérito

上記の公式のうち O は基準時が発話時にあることを、P は基準時が既定の過去時にあることを示す。この公式に従えば、p. s. は発話時を基準時としながらそれと前時的関係にある事態を示すことになるが、前節で述べたように、この前時的関係は当該事態の不成立から成立への変化に等しい。一方、imp. は既定の過去時を基準時としながらそれと同時的関係にある事態を示す時制形式ということになる。

また、山村(1996)に従えば、同じ時制形式は常に同じ公式によって記述されねばならない。つまり、R & V が4つの異なる公式で記述した先の *condicional* も、山村(1996)では、その主動詞が何であれ常に P+V という公式で分析されるのである。これは「同一の時制形式の機能はその出現環境に関わらず常に等しい」という主張に基づくものである<sup>33), 34)</sup>。

### 3.3. 歴史的現在の解釈について

さて、2.3. で見た R & V の歴史的現在の解釈は、通常 *presente* の特殊用法として扱われるだけの現象をスペイン語の時制体系全体を視野に入れながら体系的に説明しようとした点で高く評価されると思われるが、疑問を覚えるところがあるのも事実である。それは、R & V の歴史的現在の分析に従うならば、「語り」における p. s. と imp. の違いが無視されることになるのではないかという点である。

(19) (=4) Te cuento: ayer iba yo tan tranquilo por la calle cuando *apareció* un chiflado en una moto que casi me *atropelló*. (p. 2891)

(20) (=5) Te cuento: ayer *voy* yo tan tranquilo por la calle cuando *aparece* un chiflado en

33) この解釈では(16)(17)で見たような p.s. の示す様々な時間関係が説明されないという反論が出されるかもしれない。しかし、そのような反論は「同一の時制形式の機能はその出現環境に関わらず常に等しい」という主張を無効にするものではない。というのも、山村(1996)、Yamamura(2000a)によれば、p.s. が示す多様な時間関係はもっぱら主動詞の語彙的制約に因るものだからである。

34) この点に関連して、R & V の記述にはその主張とは合い入れないと思われる部分がある。それは本文中に引用した *condicional* の説明に続く次の箇所である。“(...) en cualquier caso, observamos que el vector primario es siempre de posterioridad, + V, mientras que el originario es siempre de anterioridad, -V, por lo que la posible presencia de nuevos vectores carece de pertinencia.” (p. 2899) この記述に従うならば、*condicional* の機能は(O-V)+V という時間関係を示すことにあり、それ以外の時間関係は関与的ではないということになる。この解釈は本節で提示した筆者の再解釈と同じものである。従って、R & V が当該時制形式の時間関係を結局上記のように把握するとしたら、先に指摘された言語的時間関係の連鎖性の意味はなくなるように思われる。

una moto que casi me *atropella*. (Ibid.)

R & V の歴史的現在の解釈を説明した(19)と(20)の関係を見ると、(O-V)と(O-V)oV という異なる時間関係を付与されていた p. s. と imp. が同用法では同じ *presente* に書き換えられることが分かる。このことは少なくとも歴史的現在にあっては p. s. と imp. が中和してしまう、つまり、両形式間にある時間関係の差異が消失してしまうことを示唆しているものと考えられよう<sup>35)</sup>。しかし、歴史的現在の用法においてこのような p. s. と imp. の中和を認めることには、次のような問題があると思われる。

基準時 O が発話時より以前に置かれた imp. の参照時に移動した結果、imp. で表出された事態が *presente* に置換されるという考えは分かりやすい。なぜなら、imp. と *presente* は同時性 oV という第一次ベクトルを共有しているからである。他方、そのような *presente* と共有した第一次ベクトルを持たない p. s. によって表出された事態が *presente* に置換されるというのは理解し難い。R & V の時制形式の解釈がとりわけ体系内の整合性を重視したものであるだけに、この点はどうしても看過できない。

また、歴史的現在における p. s. と imp. の中和化は、先に見た R & V のアスペクト無用論の弱点になる可能性もある。2.5. で見たように、R & V が p. s. と imp. の機能的差異をアスペクト範疇によって説明できないとした理由のひとつは、両形式の間には当該項を最小対と見なすのに必須の中和が存在しないからというものであったのだが、歴史的現在への置換という操作において起こる p. s. と imp. の同一化はまさにその中和を認めることになるからである。

#### 3.4. アスペクト説批判の方法について

結論を先に述べるならば、筆者は R & V と同様、少なくともスペイン語の p. s. と imp. の違いをアスペクト範疇によって説明することは難しいと考えている。しかし、その妥当性を示す際に用いた R & V の方法にはいささか問題があるとも思っている。ここではその点を指摘してみたい。

R & V によれば、当該対立項にアスペクト範疇を導入するには両者間の時制的価値の等価性が保証されていなければならないのだが、それぞれ(O-V)、(O-V)oV と分析される p. s. と imp. にはそのような時制的等価性が存在しない、よって、アスペクトを導入することはできない、ということだった。筆者は R & V の p. s. と imp. の分析自体間違っただけとは思わないが、アスペクト論者がそれを支持することは難しいだろうと考える。なぜなら彼らの前提は p. s. と imp. の時間的同一性、すなわち、両方ともに同じ過去に定位された事態を指示する、ということにあるからだ。従って、そのようなアスペクト論者を論破するには、まず、以下のような、彼らの前提そのものが不十分であることを明示する言語事実を提示する方が得策だと考える。

35) 歴史的現在の用法における p. s. と imp. の対立の消失は厳密な意味での「中和」とは異なる。通常、「中和」とはある環境で当該項間の対立が成立せず一方の項のみが出現する現象を指すのだが、歴史的現在ではその定義上、最小対をなす p. s. と imp. のどちらも出現しないからである。しかしながら、本稿は、R & V の同用法の解釈では p. s. と imp. の対立が無効になるという点に特に焦点をあて、あえて中和という用語を用いた。



(21) Mañana se \*fue/iba Jorge a Chile. (García Fernández 1998:25)

(22) #Vine/Venía a que me hicieras un favor. (Porto Dapena 1989:98)<sup>36)</sup>

(21)は“mañana”，(22)は発話時に定位される事態に言及した文だが，どちらも imp. による表出は可能でも p. s. による表出は不可能である。このことはアスペクト論者が根拠とする「p. s. と imp. はともに過去時に定位された事態を示す」という前提を崩すものと考えられる。少なくともこれらの例によれば，p. s. は過去の事態にしか言及できないが，imp. は非過去の事態にも言及可能ということが明白だからである。筆者の観点からすれば，まさにこの事実こそ p. s. と imp. の時間的非対照性を示す第一のものなのだが<sup>37)</sup>，残念ながら R & V の論考の中にこの点についての記述はない。

次に，R & V の批判にはアスペクト論者が依拠するアスペクトという範疇の特質に関する言及がないというのも問題だと思われる。というのも，アスペクト論者がアスペクトという範疇の導入を主張するのは，それによってうまく説明される言語事実があるからに他ならないからである。従って，その説を批判する際にはその言語事実の精査が不可欠なのである。

「アスペクト」とは一般に当該事態の時間的限定性の有無を示す文法範疇だといわれているが<sup>38)</sup>，アスペクト論者が p. s. と imp. の機能的差異の説明にこの用語を用いるのも，両形式の違いがこのアスペクトの定義によく当てはまるものだからである。その証拠として，彼らは次のような対立を持ち出す。

(23) Juan amó/\*amaba a salomé durante varios años. (García Fernández 1999:3145)

(24) Aquella tarde María bailó/\*bailaba vales durante dos horas. (Ibid.)

(23)(24)が示すように，p. s. と imp. のうち時間的限定を示す副詞句と共起できるのもつぱら p. s. であるというのはよく知られた事実である。アスペクト論者はこのことから，p. s. は時間的限定性の表示において有標の完了アスペクトを，他方，imp. は時間的限定性の表示において無標の未完了アスペクトを持つと主張する。しかし，山村(1999)，Yamamura(2000b)によれば，以下の例が示すように，imp. も時間的限定を示す副詞句と共起することは可能である。

(25) Durante esos cuatro años vivió/vivía en un pequeño apartamento. (山村 1999:14)

(26) Durante los tres años de la guerra vivió/vivía en Madrid. (Ibid.)

(27) Del año 1975 al 1980, María vivió/vivía en Barcelona. (Ibid.)

(23)(24)の副詞句と(25)(26)(27)のそれとでは，前者がただ限定された期間を示してい

36) # は当該形式が文脈上不適切であることを示す。

37) p. s. と imp. の時間的非対照性はこの他に，R & V が提示した話法転換時に見られる両形式の振る舞いの違い，3.1. で筆者が指摘した，命題の中には imp. による表出は可能でも p. s. によるそれは不可能なものがある，という事実によっても示される。

38) Cf. García Fernández (1999), p. 3138.

るだけなのに対し、後者は限定された期間のみならずそれが何らかの形で特定化されたものであることを示しているという違いがある。従って、imp. が時間的限定を示す副詞句との共起できるか否かには、当該副詞句の特定性が大きく影響していると考えられるが、今重要なのは期間限定を示す副詞句と imp. が共起可能だという事実、および、その事実によればアスペクト論者はその論拠を失いかねないということである。筆者はアスペクト説を批判するにはこの点こそを強調すべきと考える。

#### 4. 結びに代えて

以上、『スペイン語記述文法』の第2巻第44章に掲載された Guillermo Rojo と Alexandre Veiga の執筆になる「動詞時制. 単純時制」の紹介を行った。紙幅の関係もありその全貌を詳しく見ることはできなかったが、同論文の特徴はおおよ次のようにまとめられるだろう。

- ・単純形、複合形を問わず、すべての時制形式を基準時とそれに対する時間関係という統一的観点から分析している。
- ・諸時制形式に見られるモーダルな用法を当該形式の本来の時制機能と関係づけながら体系的に説明しようとしている。
- ・スペイン語の動詞体系にはアスペクト範疇は必要ないと主張している。

第3節で指摘したように、R & V の解釈には疑問の残る部分もないわけではない。しかしながら、それがスペイン語の時制研究に与えた影響の大きさはやはり否定し難いものがある。このことから、彼らの論考は今後ともスペイン語時制研究の必読文献として研究者を大いに刺激し続けていくと思われる。

#### 参考文献

- Bello, Andrés (1847): *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos*, Santiago de Chile: Imprenta del Progreso.
- Benveniste, Émile (1965): “El lenguaje y la experiencia humana”, en *Problemas del lenguaje*, pp.3-12, Buenos Aires: Ed. Sudamericana.
- Bull, William E. (1960): *Time, Tense and the Verb. A Study in Theoretical and Applied Linguistics with Particular Attention to Spanish*, Berkeley: University of California Press.
- Carrasco Gutiérrez, Ángeles(1998): *La correlación de tiempos en español*, tesis doctoral, la Universidad Complutense de Madrid.
- Coseriu, Eugenio (1980): “Aspect verbal ou aspects verbaux ? Quelques questions de théorie et de méthode”, en David J. & R. Martin (eds.), *La notion d’aspect*, pp.13-25, Metz: Université de Metz.
- Doiz-Bienzobas, Aintzane (1995): *The Preterit and the Imperfect in Spanish: Past Situation vs. Past Viewpoint*, Dissertation, San Diego: University of California.

- García Fernández, Luis (1998): *El aspecto gramatical en la conjugación*, Madrid: Arco/Libros, S.L.
- (1999): “Los complementos adverbiales temporales. La subordinación temporal”, en Bosque, I & Demonte, V. (eds.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, pp.3129-3208, Madrid: Espasa Calpe.
- Klum, Arne (1961): *Verbe et adverbe. Étude sur le système verbal indicatif et sur le système de certains adverbes de temps à la lumière des relations verbo-adverbiales dans la prose du français contemporaine*, Upsala: Almqvist & Wiksel.
- Porto Dapena, José Álvaro (1989): *Tiempos y formas no personales del verbo*, Madrid: Arco/Libros, S.A.
- Reichenbach, Hans (1947): *Elements of Symbolic Logic*, New York: The Free Press, London: Collier-Macmillan.
- Rojo, Guillermo (1974): “La temporalidad verbal en español”, *Verba* 1, pp.68-149.
- Veiga, Alexandre (1987): “El presente histórico como hecho de sistema verbal”, *Verba* 14, pp.169-216.
- (1990): “Planteamientos básicos para un análisis funcional de las categorías verbales en español”, en G. Wotjak y A. Veiga (eds.) *La descripción del verbo español*, pp.237-257, Santiago de Compostela: Universidade de Santiago de Compostela.
- Yamamura, Hiromi (2000a): “Nuevo acercamiento a la concordancia de tiempos en español—con especial referencia a la interpretación propuesta por Carrasco Gutiérrez (1998)”, *Lingüística Hispánica* 23, pp.109-132.
- (2000b): “Unas dudas sobre la interpretación basada en la oposición aspectual del pretérito simple y el pretérito imperfecto” 『言語文化論究』 No. 12 (九州大学言語文化研究院), pp.145-154.
- 山村ひろみ (1996): 「Canté/canataba のアスペクト対立に基づく解釈をめぐって」 *HISPANICA* 40 (日本イスペインヤ学会), pp. 48-62.
- (1997): 「ser コピュラ文の pretérito による表出について」 『独仏文学研究』 第47号 (九州大学独仏文学研究会), pp. 81-102.
- (1998): 「pretérito による表出のための条件 — 無生主語文の場合」 『言語文化論究』 No. 9 (九州大学言語文化部), pp. 185-207.
- (1999): 「スペイン語の imperfecto と時間的限定性」 『言語文化論究』 No. 10 (九州大学言語文化部), pp. 11-32.